

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	人工呼吸器装着の ALS 独居患者の在宅生活を支える学生システム
演者名	伊藤和也 1)、斉藤沙耶 1)、小松裕恵 2)、高橋みどり 1)、 松木愛里 1)
所属	1) 岩手県立大学看護学部 2) 岩手県立大学社会福祉学部

目的：筋委縮性側索硬化症（以下 ALS）で在宅療養をしている N 氏は、自分をケアする介護事業所をたちあげ、さらに大学生の有償ボランティアを活用して独自のシステム（以下学生システム）を作成し自身の独居生活を可能とした。このシステムにより N 氏は家族に負担をかけることなく、学生は N 氏のケアを通して介護、看護の実践的及び有意義な学びの場となったので報告する。

実践内容：平成 21 年より ALS で一人暮らしの N 氏の夜間帯の見守り及びケアを行うため、学生システムを開発した。日中は N 氏の介護事業所がケアを行うが、夜間は I 大学の学生ら（看護学部、社会福祉学部）で、就寝前のナイトケア・起床後のモーニングケア・喀痰吸引・経管栄養を行っている。（学生らは規定の重度訪問介護員の資格講習、及び吸引講習は受けており、法的な問題はクリアーしている。）

実践効果：学生システムにより、夜間のケアは全て学生によってなされ専門職のヘルパーを必要としない体制を築く事が可能となった。①学生はコミュニケーション技術の向上②N 氏を含むチームで取り組むことの大切さ③よりよいケアとは何か等を考えるきっかけとなっている等、大学では学び得ない看護及び福祉の大事な学びを実践の場で実感し、さらに自分たちの見識及び経験を深める場となっている。これらのことに対し、N 氏は学生の育成に尽力し、生きがいであると語っている。

考察：学生システムは N 氏及び学生の双方にとってお互いに良い作用をもたらす場となっている。このシステムを通して、お互いの関係は利用者と介護者だけに留まらず、「新しい意味」が生まれ、介護することに対して「やりがいや喜び」を見出すことができた。

今後私たち学生は N 氏の学生の育成に生きがいを感じているという言葉を大事にして、次の世代の学生たちに引き継ぎを行いながら、N 氏のケアを担当することに大きな意味を持って積極的に参加したいと考える。